

序論

1. 研究背景及び研究動機

16世紀の大航海時代以降、台湾がスペイン、オランダ、明鄭、清朝、日本、国民政府らの統治政権期に受けた影響は、建築物や建築技術に反映されており、建築文化の多様性となっている。しかし別の角度から見れば、政権交代が複雑であるために、人々の台湾文化の主体性についての認識は不足しており、その後の文化の記憶やその保存の障害となっている。こうした現象は、建築装飾にも表れている。

筆者は1998年以降、左官装飾関係の職人にインタビューを行ってきた。初めてのインタビュー対象者である陳金福氏¹(左官職人)は日本教育を受け、大平洋戦争では海軍として徴兵を受け、日本の工匠に家のリフォーム技術を学んだ人物である。また、福建語を話す93歳の姚自来²氏(剪粘と交趾焼職人)の技芸は、かの中国福建の職人より伝承されたものである。しかし、中日戦争の開始によって師匠は急遽中国へ帰国し、二度と台湾の地を踏むことが無かったために、姚氏と兄弟子達が独立して廟宇の工程を完成させた。陳氏と姚氏とは、その技芸と使用する建築材料が異なり、それは日本と福建泉州それぞれの影響を受けたものである。しかし、政権交代によって技術や材料の供給元が断たれることにより、習得した技芸を修正し、現地の材料を用いる必要性が生じたのであった。こうした事情によって、左官装飾はゆっくりと台湾元の建築に適した形に発展していく。



【図 0-1】87 才の陳金福（筆者撮影）

しかし現在、高齢となった職人達の技芸を継承する者は絶え、多くの優れた作品も廟宇の改築によってほとんどが破壊されたために、完全な形で50年以上保存されているものは稀な例となっている。伝統文化の消失は我々の考えているよりもずっと速く進行しており、それは時間との競争でもあり、今行動しなければ、明日には後悔が待っているかもしれないのである。

今まさに、この対処が求められており、それに呼応して研究も進展しているが、未だ充分とは言えない。よって修士論文³からの継続である本研究を通して発見したものやその成果の収集は、たとえそれが小さなパーツであったとしても、繋ぎ合わせて、古人が残した大切な文化を根付かせ、代々伝承させるべきだと考えている。この研究成果の積み重ねが、今後の技芸保存や文化財修復の基礎資料となることを切に願っている。

¹ 陳金福氏、左官職人・型製造職人、1927(昭和2)年、台北州北投生まれ。彼は筆者に対し、身振り手振りで熱心に日本の専門用語を解説したのであが、その時、日本語のできなかった筆者はただスポンジのようにそれを吸収し、あとからゆっくり消化していくという方法しか取ることができなかった。

² 姚自来氏、剪粘職人・土糊職人・交趾焼職人、1910(明治44)年、台北州生まれ、2007年歿。師匠は福建泉州からの職人である洪坤福。

³ 葉俊麟、『日本統治時代における「人造石洗出し」技術に関する研究』、中原大学修士論文、2000年。

2. 本論文の問題意識

本論で言う「左官装飾技芸」とは、左官装飾の基礎工事に関する細部装飾全般を指すが、明末期と清朝時代に福建と広東地域から台湾へ伝わった剪粘(ジェンネン)、交趾焼、泥塑(でいそ)、日本統治時代に日本から伝わった人造石塗、左官彫刻、鏝絵なども含むものとする。左官装飾技芸は台湾建築に応用され、多様な組み合わせによる台湾特有の建築を形成した。左官装飾は「形式と作法」から「土糊(鏝絵/泥塑)」「人造石塗」「剪粘」「交趾焼」の四類型に分類することが出来る。

「土糊」(鏝絵/泥塑)とは、瓦、或いは鉄線で骨組みを作り、その上に灰泥⁴を塗り付けて様々な形を作り装飾したもので、日本の鏝絵に相当する装飾技術である。

「人造石塗⁵」とは、セメントに碎石、細砂、石粉、水などを混ぜ合わせ、必要な形を作り、色付けしてから、凝固させると完成するが、石造建築の質感を模倣することが出来るため、天然石材の代用品として使用される。

「剪粘」とは、割れた茶碗の破片や色ガラスなどを再利用して必要な形に刻み、作品の表面に一つ一つ貼って作られる装飾のことである。

「交趾焼」は緑、黄、褐色などの釉薬用い低温で焼成した焼き物のことで、いわゆる三彩の一種である。現在では台湾の独特な文化として、鮮やかな色彩と繊細なタッチを用い、装飾品に仕上げられることが多い。寺廟、古民家にこれらの装飾が施される場合、屋根、壁、水車堵⁶(すいしゃと)に作られることが多い。

台湾の左官装飾技芸は、主に17世紀頃に中国福建と広東地区からの移民⁷とともに流入し発展した。その後、日本統治時代に大量の公共建築が建設され、この時に台湾の左官職人と剪粘職人のうち技術のある者たちが、当時日本で流行していた左官装飾技芸に学び、これを模倣する形で取り入れた。一方で同じ時期に、外国で事業に成功し台湾へ帰国した華僑や、福建や広東地域からアジア各地へ移住した中国人の中で、その後、台湾に移住してきた人たちは、これまでとは異なった住居を必要とするようになっていた。台湾でも、そうした需要に応えるため、左官装飾職人は台湾の伝統的な工法や材料による左官装飾技芸に、外国の建築様式や装飾技術を取り入れた。その結果、様々な新しい装飾技芸が創造され、台湾建築における左官装飾の多様性が促進された。

このように、台湾の建築における左官装飾技芸は、福建、広東、日本、そして海外の華僑地

⁴ 灰泥(はいどろ)の主成分は石灰で、これに砂、糖汁、綿花または麻系の繊維などを混和させたものである。日本でいう漆喰に当たる。

⁵ 人造石塗は人造石の一種である。ゆえに人造石洗出し・人造石研ぎ・人造石切りなどの改装技術は、全て人造石塗の工法の一つであって、近代建築によって発展した施工技術に属する。

⁶ 中国語で、寺廟や古民家の壁の上部に、装飾品を設置するために使用される場所を指す。

⁷ 引用二階堂 善弘の「台湾新莊市の寺廟について」には次のように書かれている：『明代にはオランダ人による台湾支配があり、さらに鄭成功の割拠があったこともあり、移民が自由に行き来することは難しかった。しかしその後は清王朝の版図となったため、表向きの渡航は禁止されていたものの、実際には大量の開拓民が台湾に押し寄せることになった。』(二階堂善弘、「台湾新莊市の寺廟について」『コミュニケーション学科論集(茨城大学人文学部紀要)』第5号、1999.3、pp.115～129。)

区の影響を受けつつ、職人による学習と模倣の積み重ねによって、次第に独特の意匠や特殊技法、地域独特の様式が形成されることとなった。しかしながら、その左官装飾技芸にどのようなものがあるかは明らかにされていない。また、その技芸は近年失われつつあり、その記録と保存が必要となっている。

また、現代化と西洋化の課題において、清代の台湾は中国の端にある漢人の移民社会であり、強烈な移民社会の性格を伴う。台湾は中国の技術に頼り、所謂「唐山司傅（中国職人）」が海を越えて台湾に渡ってくるという定型化された营造方式を形成しており、それは中国の自発的な母文化とは異なるものであった。清代末期には開港貿易が始まり、台湾は直接西洋文化との接触を始め、35年の時が過ぎたが、台湾が主に受けた西洋文化の影響は、日本統治時代からの間接的な影響であった。日本が台湾にもたらした現代化は、植民地統治に伴うものであり、これは現代化の過程で社会衝突を起こし、より複雑で混乱した権力の統治をもたらした⁸。

建築職人達が接した現代化の衝撃は、半強制的に横方向に広がって行くものであり、台湾社会や固有の伝統技術の上に構築されたものではない。それに対し、彼らがどのように対処し適合していったのか、例えば伝統工匠や職人などの設計権利は剥奪され、図面に従って施工するのみとなったのか、或いは最下層の労働力として駆りだされたのかは、研究の余地あるテーマである。



【図 0-2】土糊（台北県淡水瑾山寺、筆者撮影）



【図 0-3】人造石塗（桃園県大溪老街、筆者撮影）



【図 0-4】剪粘（台南佳里金塘殿、筆者撮影）



【図 0-5】交趾燒（新竹県新埔廣福宮、筆者撮影）

⁸ 例えば都市建設について言えば、市区改正の実施、住宅外壁の飾りなどは美観を追求するために統一され、タイルや人造石塗が大量に使用された。これは伝統的な泥塑(土糊)技芸に取って代わり、廟宇以外において、台湾固有の左官装飾技芸が見られる住宅や公共施設はだんだんとその舞台を失っていった。

3. 研究目的と研究意義

以上のような問題意識に基づき、本研究では、以下の事柄を明らかにすることを目的とする。

(1) 台湾近代における「左官装飾技芸」は、どのような条件で流入し発展し、どのような特徴をもっていたのか。

(2) 日本統治時代に日本から伝わった左官技術は、どのような影響をもたらしたか。

本研究で主に扱うのは、「技芸(美術工芸にかかる技術)」であるが、適宜「職人(伝承、事跡)」と「材料(作品)」を加えて比較検証する。そのことによって、台湾左官装飾技芸(剪粘、交趾焼、人造石塗、土糊など)やその材料の転変に関する歴史的展開の過程が明らかになると考えられる。

本論文は、台湾文化財における左官装飾の修復工事に関する基礎研究を確立することに意義がある。本論文は、台湾の寺院、古民家、歴史的建造物及び文化財の保存修復工事に関する修復技術や歴史考証、保存理論など、実際の修復に有効な参考資料となることが期待できる。

4. 既往研究の状況

近年建築学界では伝統技芸と職人達の生涯に関する研究が注目され始めており、これによって多くの論文が累積された。しかしこれらの研究は単一技芸における研究(例えば、廟宇建築の装飾技術である「剪粘」など)か、または単一職人やその派の作品研究を扱うものが主となっており、各技芸と職人をまとめ、そこから技術史観と文化財保存史観に対して全体的な研究や論述を行った例は見られない。本論は、初めての総括的研究となるものである。

本研究では、台湾に於ける「左官装飾技芸」に派生する関連技術と材料に着目しているため、左官装飾技芸(土糊、泥塑、人造石塗り、交趾陶、剪粘など)に対する関連既往研究を、(1) 建築職人に関する研究、(2) 台湾の左官装飾に関する技芸の研究、(3) 左官と人造石に関する日本建築技術の研究、の3つの観点から収集、整理した。

(1) 建築職人に関する研究

10年前から台湾建築学界で伝統的建築職人が重視され始めているため、建築職人を扱った研究として挙げておくべきものは多くなるが、例えば、調査研究報告書としては、李乾朗「台湾古建築圖解字典⁹」「伝統營造匠師派別之調査研究¹⁰」「台湾伝統建築匠芸五輯¹¹」、洪文雄「台閩地区伝統工匠之調査研究(第一期)」¹²、林會承主編「歴史建築資料庫分類架構と網際網路建置¹³」「台湾伝統建築手冊」、薛 琴「關西太和宮調査研究と修復計畫¹⁴」、葉俊麟「剪粘芸師 姚自来作品與技芸之調査研究¹⁵」が挙げられる。

修士論文としては、曾永鴻「林添木交趾陶芸術之研究」(文化芸研所碩士論文、1996年)、侯皓之「安平伝統剪粘芸師流派及其作品研究」(国立成功大學芸術研究所碩士論文、1999年)、鄭春鐘「彰化永靖剪粘司傅群之研究」(中原大學碩士論文、2000年)、張淑卿著「剪粘司傅何金龍研究 - 在台期間之事蹟及作品」(国立芸術學院伝統芸術研究所碩士論文、2001年)、褚如君「姚自来於交趾陶芸術的發展研究」(国立台湾芸術大學造形芸術研究所碩士論文、2007年)、曾淑婷「交趾陶匠師朱朝鳳技芸研究」(国立台湾芸術大學造形芸術研究所碩士論文、2008年)、范雅婷「交趾陶匠師陳天乞之研究」(国立台湾芸術大學造形芸術研究所碩士論文、2009年)が挙げられる。

(2) 台湾の左官装飾に関する技芸の研究

博士論文としては、葉乃齊「台湾伝統營造技術的變遷初探 清代至日本殖民時期」(国立台湾大學建築與城鄉研究所博士論文、2002年)が挙げられる。また、修士論文としては、葉俊

⁹李乾朗「台湾古建築圖解字典」、2003年、台北：遠流出版社。

¹⁰李乾朗「傳統營造匠師派別之調査研究」、1988年、台北：文化建設委員會。

¹¹李乾朗「台湾傳統建築匠藝五輯」、2002年、台北：燕樓股建築出版社。

¹²洪文雄「臺閩地區傳統工匠之調査研究(第一期)」、1993年、台中：東海大學建築研究中心。

¹³林會承「歴史建築資料庫分類架構暨網際網路建置報告書」、2005年、臺北：文化建設委員會。

¹⁴薛 琴「關西太和宮調査研究暨修復計畫」、2003年、新竹：新竹縣文化局。

¹⁵葉俊麟「剪粘藝師姚自来作品與技藝之調査研究」2005年、台北：財團法人國家文化藝術基金會助成。

麟『日治時期洗石子技術之研究』(中原大学建築系碩士論文、2000年)、張宇彤「澎湖地方傳統民宅營造法探微」(東海碩論、1981年)、張英裕¹⁶「台湾における寺廟裝飾「剪粘」に関する研究」(千葉大学大学院自然科学研究科修士論文、2002年)、李奇芳「台湾傳統民居交趾陶之研究 - 以摘星山莊為例」(中国文化大學/建築及都市計畫研究所、2004年)、陳培卿「台湾寺廟建築剪粘裝飾施作程序之調查研究 - 以台閩地區第二級古蹟台北市大龍峒保安宮〔後殿〕為例」(中国文化大學/建築及都市計畫研究所、2000年)、劉淑音「台湾傳統建築吉祥裝飾-集瑞圖稿的表現與運用」(国立台北大學民俗藝術研究所碩士論文、2002年)が挙げられる。

これらの研究は単一技芸における研究(例えば、廟宇建築の装飾技術である剪粘或いは交趾陶など)か、または単一造営方法の研究を扱うものが主となっており、各技芸と職人をまとめ、そこから技術史観と文化財保存史観に対して全体的な研究や論述を行った例は見られない。例えば、張氏と陳氏の研究による剪粘についての論文は、職人達に関する標本抽出量も不足しているため、幅広いが内容に乏しいのが欠点である。しかし職人へのインタビューを通じた剪粘材料やその工法に関する詳細な解説があり、この部分において参照する価値がある。

(3) 台湾左官と人造石に関する建築技術の研究

永坂淺治郎「擬石塗施工に就ての所感¹⁷」では、日本統治時代の昭和4年に材料の供給者であった著者が、旅行で見聞きしたことを参考に、台湾と日本の擬石塗施工の流行について論述し、特に人造石塗りについてその優劣の評価を行っており、非常に参考価値の高いものである。

尾辻国吉「台湾建築界の回顧¹⁸」「明治時代の思ひ出」では、日本統治時代における建築の発展が3期に分けて論じられている。第2期における水平装飾は人造石洗出しで表現されるが、初期人造石洗出しの施工の難しさについて物語っており、当時の施工情況が理解できる。

田中大作『台湾島の建築に関する研究-台湾建築の全貌¹⁹』は、著者が台湾在住時に実測調査して集めた資料を日本に持ち帰り、戦後間もない昭和25年に書き上げたとみられる。全体は六章構成で、第一章「台湾の自然と住民」、第二章「台湾の建築と其の特性」、第三章「高砂族の固有建物」、第四章「台湾人の伝統的建築」、第五章「西洋人の營みたる建築」、第六章「日本人の營みたる建築」となっている。論考のみならず、昭和年間における多くの建築物の古写真も参考価値の高いものである。

¹⁶ この論文の筆者は建築学に従事していた経験は無く、台湾の伝統的な建築に関する知識は主に現段階の研究成果を引用したものであり、多くの歴史考証もまた、資料の引用に依っている。しかし職人へのインタビューを通じた剪粘材料やその工法に関する詳細な解説があり、この部分において参照する価値がある。

¹⁷ 永坂淺治郎、「擬石塗施工に就ての所感」『台湾建築會誌』第一輯第五號、台湾建築學會。1929(昭和4)年、pp.17-18

¹⁸ 尾辻国吉、「台湾建築界の回顧」『台湾建築會誌』第十五輯第四號、台湾建築學會。1943(昭和18)年、pp.133-136

¹⁹ 田中大作『台湾島の建築に関する研究-台湾建築の全貌』、1950(昭和25)年、台北科技大學、2005年12月出版。

5. 研究範囲及び方法

(1) 研究対象

研究対象は左官装飾が施された建築物とそれに携わる職人及び関係者が主となるが、建築物としては、寺廟や伝統的な古民家や日本統治時代(1895年-1945年)の街並みを主な調査対象とし、これらの建物の実測などによって調査した。

一方、台湾における左官装飾の職人としては、「左官職人」「土糊職人」「剪粘職人」「交趾焼職人」「型製造職人」などを対象としているが、これらに対してはインタビューを実施し、主に使用道具、技術、仕事状況、作品などを調査する。台湾の職人は、現在も伝統技芸に基づき施工を行う者がいる。早期に職人の口述資料により施工方法を明らかにして実例との照合を行い、記録として残すことで、職人の減少によって伝承が途絶えることを防ぐことが可能となる。

(2) 研究範囲

研究地域としては、台湾本島、金門列島、澎湖列島を主な対象とする。また、研究対象となる時代については、清朝末期および日本統治時代に、左官装飾が残される事例が多いため、清朝末期から日本統治時代の50年間と国民政府時期を研究の主な対象とする。しかし、技術や技芸は政権交替した後も中断することがなかったため、「時間軸の適度な延伸」は避けられない。そこで、一部の論述に関しては、その完成度を上げるため、左官装飾に関する「現代の事例」を論述に組み込んだ。

(3) 研究方法

左官装飾技芸に関する資料は大別して、雛形類の文献資料と、口伝の類の非文献資料の2つから成る。前者については先行研究が豊富であるが、後者についてはその重要性にも関わらず、まだ研究が充分だとは言いがたい。そこで本研究では左官装飾技芸者への聞き取りを行い、非文献資料の収集を試みた。これを上記の実例と比較調査することで、左官装飾技芸がより詳細に明らかになると思われる。

歴史資料の収集

左官装飾技芸に関連する資料は、主に2つの方法で収集した。ひとつは図書館、公共機関、学校、私立財団などで論文や報告書などを収集する方法であり、もう一つは実地調査の際に、本研究に関連する遺物を収集する方法で、例えば古写真、建築図面、手紙、帳簿、家系図、道具、建材を収集した。

現地調査：左官装飾の作品取材及び設置場所の調査

左官装飾作品の類型、材料の種類、設置場所等細部の変遷を調べるために行った。選択の際には、重大な汚れや欠損が無いこと、外観の様子がはっきり確認できることを原則とし、写真撮影による記録を行った。更に、一部の作品について測量記録を行った。

職人のインタビュー

先述のように、技術資料には一般に文献資料と非文献資料とがあり、左官装飾のような技芸の場合、非文献資料がほとんどである。具体的には、職人が徒弟制度を通じ受け継いだ「専門知識」ということになるが、こうした知識の収集は、存命する伝統職人へのインタビューに頼るより他はない。よって本研究では、職人の口述による情報を収集した上で、実際の施工事例と照合し、検証を行った。

インタビューを行った職人は、50歳以上の「左官職人」「土糊職人」「剪粘職人」「交趾焼き職人」「型製造職人」であり、特に日本統治時代に施工に参加した者を選定した。インタビューの内容は主に、使用道具、技術、仕事状況、経歴と作品に関する事項である。

【表 0-1】インタビュー職人及び関係者

姓名	出生	職別
姚自来	1910(明治 44)年、台北州生まれ、2007 年歿	剪粘職人・土糊職人・交趾焼職人
陳金福	1927(昭和 2)年、台北州北投生まれ	左官職人・型製造職人
郭徳蘭	1928(昭和 3)年、台北州大稻程生まれ	剪粘職人・土糊職人・型製造職人
林再興	1929(昭和 4)年、台南州新港生まれ、2010 年歿	剪粘職人・土糊職人・交趾焼職人
陳根庸	1930(昭和 5)年、台北州淡水生まれ	左官職人
姚榮次	1931(昭和 6)年、台北州生まれ	剪粘職人・土糊職人
廖文蜜	1935(昭和 10)年、桃園觀音生まれ	左官職人
蘇清良	1937(昭和 12)年、高雄州生まれ	左官職人・型製造職人
柯国聯	1940(昭和 12)年、台北州基隆生まれ	剪粘職人・土糊職人
陳義雄	1945(昭和 19)年、台北士林生まれ	剪粘職人・土糊職人・交趾焼職人
郭互富	1949 年、台北大稻程生まれ	土糊職人・型製造職人
陳三火	1949 年、台南麻豆生まれ	剪粘職人・土糊職人
沈清輝	1951 年、台南県白河生まれ	剪粘職人・土糊職人
陳世仁	1951 年、台北県生まれ	剪粘職人・土糊職人・交趾焼職人
備考：日本統治時代生まれの人物については、生まれ年に和暦を追加した（筆者制表）		

6.用語の定義

(1) 技芸

《広辞苑第六版²⁰》によると、技芸とは「美術工芸など、芸術方面にかかわる技術」。本論で言う技芸は工芸に相当する装飾技術である。

(2) 工芸

《広辞苑第六版》によると、工芸とは「工作に関する技術。美的価値をそなえた実用性を作る。陶芸・木工・染織など。」本論で言う工芸或は法律で言う工芸は、技芸に相当する装飾技術である。

(3) 左官装飾技芸

本論で言う「左官装飾技芸」とは、左官装飾の基礎工事に^{せんねん}関する細部装飾^{でいそ}全般を指すが、明末期と清朝時代に福建と広東地域から台湾へ伝わった剪粘、交趾焼、泥塑、日本統治時代に日本から伝わった人造石塗、左官彫刻、鏝絵なども含むものとする。

(4) 左官装飾図説

本論で言う「左官装飾図説」とは左官装飾職人が描いた左官装飾に関する説明書。その中には文章から図から構成された図説の^{せんねん}絵画製作。剪粘図説、交趾焼図説、泥塑図説、鏝絵図説、左官彫刻図説なども含むものとする。例えば、寺院屋根の竜の図説。

(5) 剪粘(せんねん)

剪粘とは、割れた茶碗の破片や色ガラスなどを再利用して必要な形に^{せんねん}刻み、作品の表面に一つ一つ貼って作られる装飾のことである。台湾伝統建築や閩南建築の専門用語。

(6) 交趾焼(こうちやき)

《文化財用語辞典》²¹によると、交趾焼とは『中国の南部で、明時代ごろ焼かれた一種の三彩である。交趾の名は、交趾(ベトナム南部)と日本とを往来する貿易船で運ばれて来たところからおこったものと考えられている。』本論で言う「交趾焼」とは緑、黄、褐色などの釉薬用い低温で焼成した焼き物のことで、いわゆる三彩の一種である。現在では台湾の独特な文化として、鮮やかな色彩と繊細なタッチを用い、装飾品に仕上げられることが多い。交趾陶とも称される。

²⁰新村 出編、《広辞苑第六版》岩波書店発行、2008年(平成20年)1月11日。

²¹財団法人京都府文化財保護基金編集、《文化財用語辞典》、第一法規出版株式会社発行、昭和51年5月15日

(7) 人造石塗

人造石塗とは人造石の一種である。ゆえに人造石洗出し・人造石研ぎ・人造石切りなどの改装技術は、全て人造石塗の工法の一つであって、近代建築によって発展した施工技術に属する。セメントに碎石、細砂、石粉、水などを混ぜ合わせ、必要な形を作り、色付けしてから、凝固させると完成するが、石造建築の質感を模倣することが出来るため、天然石材の代用品として使用される。

(8) 漆喰

《広辞苑第六版》によると、漆喰とは「日本独特の塗壁材料。消石灰にふのり・苦汁(にがり)などを加え、これに糸屑・粘土などを配合して練ったもの。」

(9) 鏝絵

《広辞苑第六版》によると、工芸とは『漆喰を塗った上に鏝で風景やなどを描き出した絵。』

(10) 左官彫刻

本論で言う「左官彫刻」とは、漆喰やモルタルを塗り付けて様々な形を作り装飾したもので、日本の鏝絵に相当する装飾技術である。

(11) 土糊(つちのり)

土糊とは、鉄線で骨組みを作り、その上にモルタルや灰泥を塗り付けて様々な形を作り装飾したもので、泥塑又は鏝絵に相当する装飾技術である。

(12) 泥塑(でいそ)

泥塑とは、瓦、或いは鉄線で骨組みを作り、その上にモルタルや灰泥(次項参照)を塗り付けて様々な形を作り装飾したもので、日本の鏝絵又は土糊に相当する装飾技術である。

(13) 灰泥(はいでい)

灰泥とはの主成分は石灰で、これに砂、糖汁、綿花または麻糸の繊維などを混和させたものである。日本でいう漆喰に当たる。

(14) モルタル

《広辞苑第六版》によると、『セメントまたは石灰に砂を混ぜて水で練ったもの。煉瓦積みせっかいのつなぎや壁・天井・床などの仕上げに用いる。』

(15) 文場(ぶんじょう)

《広辞苑第六版》によると、文場とは「文人たちの社会」。本論で言う「文場」は文人、文官、女子、仕女、女官、童子、老人などからの組み合わせとなる。物語の内容は単純で、静態的な場面で構成される。台湾伝統建築や閩南建築の専門用語。

(16) 武場(ぶじょう)

武場とは戦闘の行われる場面(場所)である。一般的には武将、脇役、背景から成る組み合わせで、脇役は兵士たち、背景は城や山や樹林である。台湾伝統建築や閩南建築の専門用語。

(17) 武将(ぶしょう)

《広辞苑第六版》によると、武将とは「軍陣の大將。 武道にすぐれた將軍。」

(18) 武将帶騎(ぶしょうたいき)

武将帶騎とは、武将や主人公が馬や動物に騎乗する姿である。武将帶騎は台湾剪粘職人や交趾焼職人の慣用の言葉である。

(19) 対場競作(たいじょきょうさく)

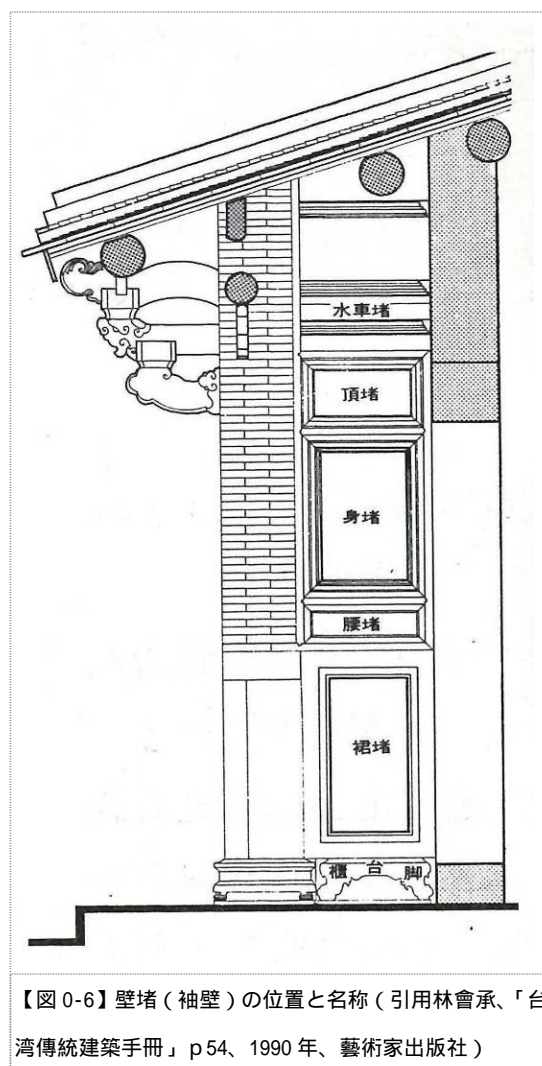
「対場競作(対場作)」という名詞の定義は、台湾伝統建築とその建築過程では、多くの場合、中心軸を境に左右或は前後の二つのブロックに分け、一つの工程をそれぞれ二つ以上の職人グループ(職人の流派)が受け持ち、最終的にそれを一つの建築物として完成させる。

(20) 排頭(はいとう)

排頭とは台湾伝統建築の屋根から突き出た平台の位置にある。屋根の設置場所である。場所は下の【図0-6】の通り。台湾(閩南)伝統建築の専門用語。

(21) 水車堵(すいしゃと)

水車堵とは壁の上方に位置し、水平方向に細長い構図となる、題材は人物の物語で、職人により物語の最も興味深い箇所を抜き取り表現される。場所は右の【図0-5】の通り。台湾(閩南)伝統建築の専門用語。



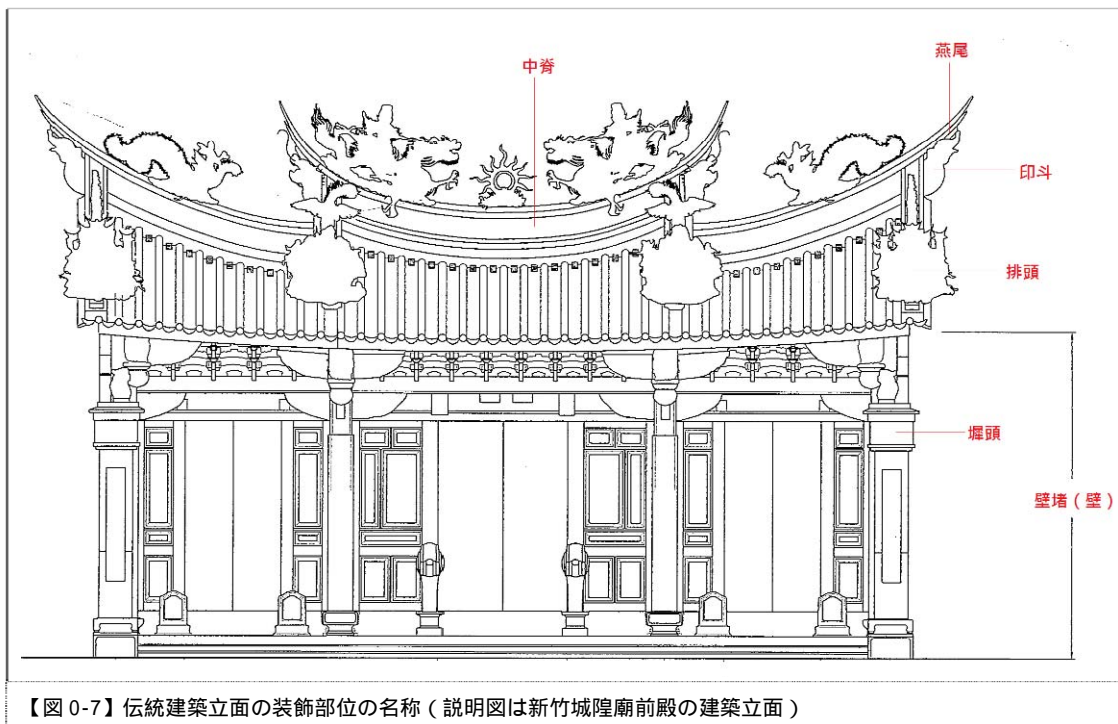
【図0-6】壁堵(袖壁)の位置と名称(引用林會承、「台湾傳統建築手冊」p54、1990年、藝術家出版社)

(22) 墀頭(ちとう)

墀頭とは台湾伝統建築の屋根と壁の接合部に位置し、場所は【図 0-6】のように長方形または正方形の外枠を有する。台湾(閩南)伝統建築の専門用語。

(23) 壁堵(へきと)

壁堵とは、室と室を仕切る板のような装飾もの。【図 0-5】と【図 0-6】のように両側の壁が対称的に配置された。日本でいう「袖壁(そでかべ)」に当たる。左の壁は竜堵(左青竜)、右の壁は虎堵(右白虎)とよばれる。台湾(閩南)伝統建築の専門用語。



【図 0-7】伝統建築立面の装飾部位の名称(説明図は新竹城隍廟前殿の建築立面)